



1

享保の改革と経済の発展

享保の改革

1716(享保元年)年、7代將軍徳川家継が幼くして亡くなり、徳川本家の血統が絶えると、家康の曾孫にあたる紀州藩主の徳川吉宗が8代將軍に迎えられた。吉宗は、綱吉以来の側用人に頼った政治をやめて、譜代大名を重視するとともに、有能な人材を登用し、武士に武芸を奨励するなど、幕府政治の改革をはかった。これを享保の改革という。

幕府の当面する課題は、財政の再建にあった。吉宗は儉約令を出し、上米の制を定めるなど財源の確保につとめた。町人の出資による新田の開発を奨励し(町人請負新田)、年貢を定額とする定免制を実施して年貢の引き上げをはかった。そのうえで、米価の下落を防止して安定させるため、それまで制限されていた大坂堂島での米の先物取引を公認した。江戸時代初期には仲間による独占的な営業を禁じられていたが、吉宗は、商人や職人が株仲間をつくることを認め、運上金や冥加金とよばれる金銭を上納させ、商工業を統制しようとした。

さらに吉宗は、評定所などの幕府の行政組織を整備し、財政難のもとで人材を登用するため、足高の制を定めた。また、裁判の簡素化をはかるため、相対済し令を出し、金銭の貸借は当事者のあいだで解決させることとした。町奉行に登用された大岡忠相は、市政の改革につとめ、裁判や刑罰の基準となる公事方御定書を編集した。また、吉宗は評定所に目安箱を設置し、庶民の意見を政治に反映させようとした。

1732年には西日本で、いなごやうんか(稲の害虫)が大発生し、全国におよぶ飢饉となった(享保の大飢饉)。米価が急騰し、翌年、江戸で有力な米問屋が打ちこわしを受けた。しかし、吉宗の晩年には、年貢の徴収高が江戸時代を通じて最高に達するなど、幕府財政は一時立ち直った。

手工業生産の発展

手工業生産は、おもに都市の職人によって行われていたが、麻・木綿・生糸などの原料作物の栽培の普及とともに、農村でも織物業を中心に農村家内工業がみられるようになった。麻織物では奈良の晒、近江の晒・蚊帳、綿織物では河内・和泉の木綿織、小倉織、久留米絁が知られる。絹織物では、高度な技術を持つ京都西陣が有名であったが、18世紀に西陣から高機が伝わり、上野の桐生や下野の足利などで使用された。これらの地域では、問屋商人が原